

熊本県文化財調査報告 第157集

鞠智城跡

一 第 17 次 調 査 報 告 一

1996年

熊本県教育委員会

序 文

鞠智城跡は、アジア情勢が緊迫した7世紀後半に、大和朝廷が築いた古代山城の一つです。九州には鞠智城跡の他に三箇所の古代山城があり、その三つの山城はいずれも国の特別史跡になっています。

このような重要性から、熊本県教育委員会では、県内で古代に築かれた唯一の山城である鞠智城跡の発掘調査を国庫補助事業や県の自主事業によって、これまで、16次にわたって実施してきました。

これまでの発掘調査の結果、貴重な文化財が残存していることが確認され、「県総合計画」の中に「歴史公園化を目指し調査と整備を促進する」と位置付けられました。文化財の保存と活用という基本的姿勢で、鞠智城跡の調査を実施しており、今回の第17次調査は、鹿本郡菊鹿町米原の長者原地区において、未調査区を中心にして調査を行いました。

調査を実施するにあたりまして、文化庁、検討委員会の先生方からご指導をいただきとともに、菊鹿町教育委員会や地元の皆様など、多くの方々のご協力を承りました。

ここに、厚くお礼を申し上げます。

平成8年3月31日

熊本県教育長 東 坂 力

例　　言

1. 本書は鞠智城跡整備事業に伴う発掘調査の調査報告書である。
2. 調査現場での遺構実測・写真撮影・遺物取り上げは、各調査員が主に行い、遺構実測・遺物取り上げについては、布里藏文化財サポートシステム熊本支店の補助があった。
3. 本書に使用した方位とグリッドは、国土座標を用いた。
4. 遺物実測・トレースは、西住欣一郎・最上 敏・亀田 学が行い、曾我敬子・三浦佐代子・川上寧子の協力があった。
5. 本書の執筆は下記の者が行った。

西住欣一郎 第Ⅰ章・第Ⅱ章第1節
最上 敏 第Ⅱ章第2節1・2
亀田 学 第Ⅱ章第2節3
6. 本書の編集は熊本県教育庁文化課で行い、西住が担当した。

本文目次

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の組織	1
第2節 調査の進行状況	1

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 道路付け替えに伴う調査について	
1. 層序について	3
2. 遺構	3
3. 遺物	6
第2節 50号建物跡とその周辺地区の調査について	
1. 調査に至る経過	12
2. 50号建物跡の調査について	12
3. 遺物	19

挿図目次

第1図 調査区位置図	2
第2図 土層実測図	3
第3図 95-道路区遺構分布図	4
第4図 D1号堅穴住居跡実測図	5
第5図 D1号堅穴住居跡出土上須恵器実測図	5
第6図 D1号堅穴住居跡出土須恵器実測図	5
第7図 D1号掘立柱建物跡実測図	7
第8図 D2号掘立柱建物跡実測図	8
第9図 D3号掘立柱建物跡実測図	9
第10図 95-道路区出土遺物実測図	10
第11図 95-道路区出土石器実測図	11
第12図 95-I区遺構分布図	13
第13図 昭和45年調査時の実測図	14
第14図 50号建物跡実測図	15
第15図 50号建物跡周辺出土遺物実測図	19
第16図 95-長者原I区出土遺物実測図	20
第17図 95-長者原I区出土九瓦実測図	22
第18図 95-長者原I区出土平瓦実測図	23
第19図 95-長者原I区出土平瓦実測図	24
第20図 鉄製品実測図	25

表 目 次

第1表 遺物観察表	10
第2表 遺物観察表	10
第3表 遺物観察表	11
第4表 遺物観察表	12
第5表 遺物観察表	25
第6表 遺物観察表	26
第7表 遺物観察表	27
第8表 遺物観察表	27
第9表 遺物観察表	28
第10表 遺物観察表	28

図 版 目 次

図版1 調査区遠景		
図版2 上 95-道路区全景	中 95-道路区西壁土層断面	下 D 3号掘立柱建物跡
図版3 上 50号建物跡全景	中 50号建物跡北側一部	下 50号建物跡土層断面
図版4 上 50号建物跡南側焼失材集中部	中 50号建物跡南側焼失材集中部の一部	
下 50号建物跡西側焼失材集中部		
図版5 D 1 壑穴住居跡出土土師器	D 1 壑穴住居跡出土須恵器	95-道路区出土遺物 95-道路区出土石器
図版6 50号建物跡周辺出土遺物	95-長者原I区出土土器	95-長者原I区出土須恵器・青磁 95-長者原I区出土土師器
図版7 95-長者原I区出土丸瓦	95-長者原I区出土平瓦	
図版8 95-長者原I区出土平瓦	95-長者原I区出土鐵製品	

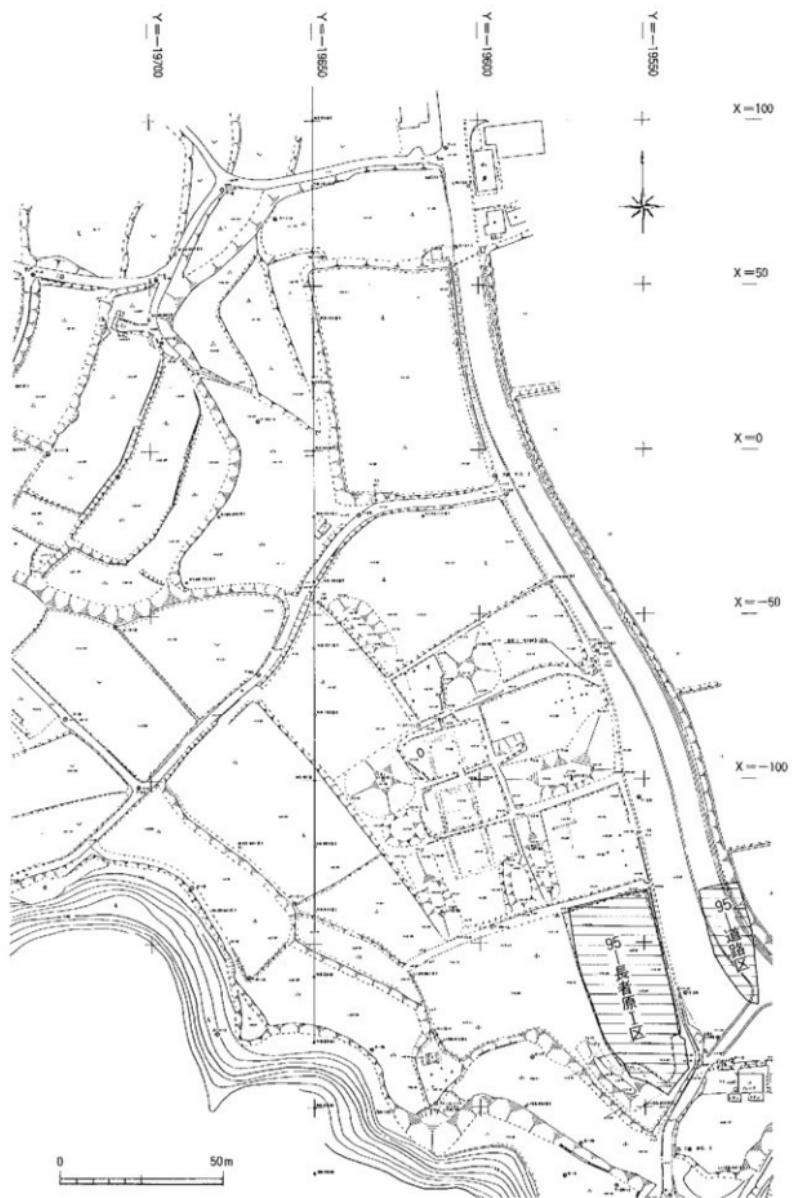
第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の組織

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	桑山裕好（文化課長）
調査・整理総括	丸山秀人（課長補佐）・大田幸博（整備係長）
調査担当者	西住欣一郎（文化財保護主事）・最上 敏（文化財保護主事）・龜田 学（学芸員） 帆足慎文（学芸員）
調査指導	堀内清治（熊本県文化財保護審議会会长・熊本工業大学教授） 坪井清足（跡大阪府文化財調査研究センター理事長） 岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授） 小田富士雄（福岡大学教授） 河原純之（千葉大学教授） 澤村 仁（愛知みずほ大学教授） 甲元真之（熊本大学教授） 北野 隆（熊本大学教授） 三島 格（肥後考古学会会長） 田辺哲夫（玉名市立博物館館長） 武末純一（福岡大学助教授） 出宮惣尚（岡山市教育委員会文化課長補佐） 乗岡 実（岡山市教育委員会主事）
調査事務局	白井哲哉（教育審議員）・藤本和夫（主幹）・高濱保子（参事）・緒方宣成（参事） 東 修（主事）
報告書担当者	西住欣一郎（文化財保護主事）・最上 敏（文化財保護主事）・龜田 学（学芸員）
協力者	菊鹿町教育員会 菊鹿町米原地区

第2節 調査の進行状況（第1図）

平成7年度の第17次調査は、長者原地区と道路付け替え箇所を行った。以前の調査区との混乱を避けるために、調査区の名称の頭に、調査年度である1995年の「95」を付けることにした。平成7年4月17日から6月9日までは、道路付け替え箇所の調査を実施した。（95—道路区）。前年度に調査を実施した深追門礎石跡が梅雨時の雨水により、土の流出の危険性があるので、調査区全体にシートを張った。シート張りは、6月12日から6月22日にかけて行った。長者原地区的調査は、6月23日から平成7年12月25日まで実施した（95—長者原Ⅰ区）。



第1図 調査区位置図

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 道路付け替えに伴う調査について（95一道路区）

1. 層序について（第2図）

道路付け替えに伴う調査区の基本層序については、調査区の西壁の一部で確認した。ここでは、下記のようにⅠ層～Ⅴ層を把握した。

- Ⅰ層 Ⅰ層は表土である。層の厚さは約14cm～22cmある。
- Ⅱ層 Ⅱ層は茶褐色を呈する客土である。層の厚さは約32cm～44cmある。
- Ⅲ層 Ⅲ層は暗褐色の遺物包含層である。弥生土器・須恵器・土師器を中心とする遺物がこの層の下部から出土した。層の厚さは約24cm～40cmある。
- Ⅳ層 Ⅳ層は縄文時代晚期の遺物包含層である。遺物は層の上部を中心とし包含される。この層は淡黄褐色土で、約16cm～26cmの厚さがある。
- Ⅴ層 Ⅴ層は黄褐色の粘質土である。この層は約5cm～10cmの深さまで掘り下げた。

2. 遺構

(1) 遺構分布について（第3図）

まず、調査区の地形を見てみる。第3図は遺構検出を行ったV層上面で測量した。調査区の南側約半分に平坦面がある。その箇所より、北西方向に緩やかに低く傾斜する。遺構はこのような地形のはば全面に分布する。

検出した遺構は、竪穴住居跡1基・掘立柱建物跡3棟・ビット155基である。これらの遺構は、他の調査区の遺構と区別するために、遺構番号の頭に「D」を付することにする。D1号竪穴住居跡とD2号掘立柱建物跡が南寄りの平坦面に分布している。D1号掘立柱建物跡はその平坦面から緩傾斜地にかけて位置している。D1号竪穴住居跡とD1号・D2号掘立柱建物跡の分布状況は、まとまっている。このまとまりより北西側に約7m行った先の緩傾斜地にD3号掘立柱建物跡がある。ビットは、竪穴住居跡や掘立柱建物跡の近くに密集して分布している。

D1号掘立柱建物跡とD2号掘立柱建物跡との建物主軸方向は、ほぼ一致しているが、これらの2棟とD3号掘立柱建物跡の主軸は異なる。D3号掘立柱建物跡の主軸が北側にやや振れる。

(2) 遺構

D1号竪穴住居跡（第4図）

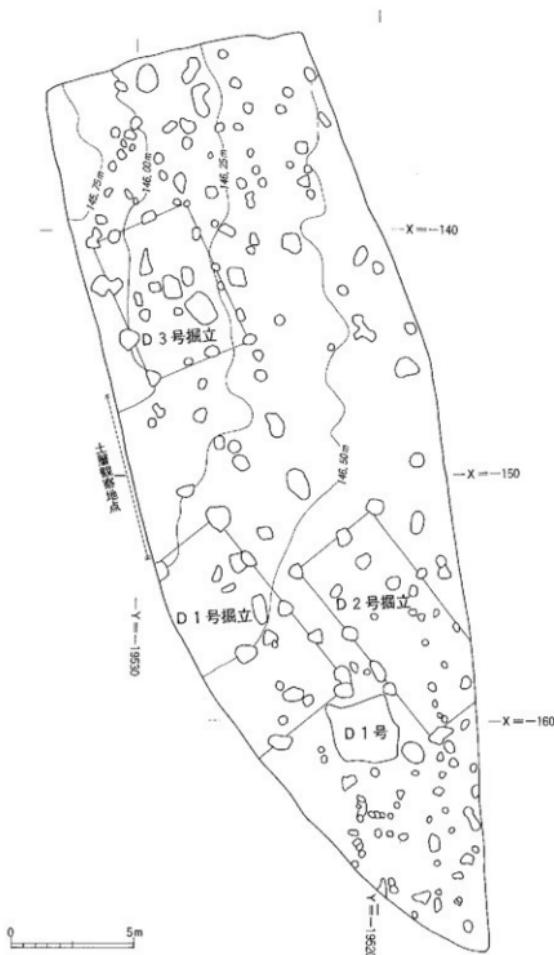
この住居跡の平面形は、不整な方形を呈し（一边約2m～2.2m）、北西隅と東壁の二箇所が外側に突出



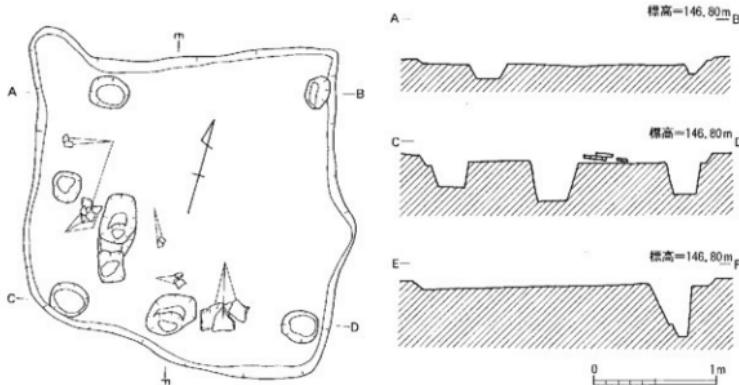
第2図 土層実測図

する。住居跡は、床面より約8cm~10cm上部が残存していた。住居跡の四隅には壁に沿った状態で、各々ピットが穿たれており、柱穴と考えられる。これらのピットの平面形は、ほぼ円形を呈し、断面形は筒状である（深さ約10cm~30cm）。これらのピットとは他に、4基のピットが南側及び南西側に寄った状態で分布している。床面はV層の黄褐色粘質土である。住居跡の内外のV層を比較すると、床面が住居跡外のV層より固くしまっているが、硬化度はあまり高くない。

須恵器・土師器の12片が床面より出土した。これらの遺物で、5組の接合が確認できた。

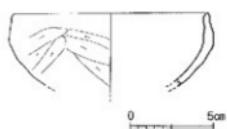


第3図 95-1道路区遺構分布図



第4図 D 1号竖穴住居跡実測図

D 1号竖穴住居跡出土遺物（第5図・第6図・第1表・第2表）

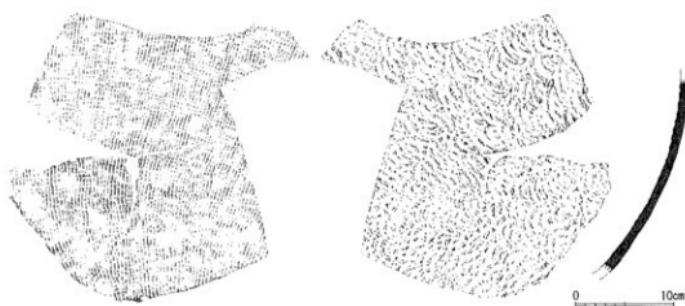


第5図 D 1号竖穴住居跡
出土土器実測図

第5図は上部器の环である。内外器面に丁寧なヘラ削きを施しており、口縁端部が丸くなる。内外器面に赤色顔料を塗布する。

第6図は須恵器の裏の胴部片であり、外に丸くなりながらのびる。内器面には同心円タタキ、外器面には平行タタキが施される。

以上の他に、固化していないが、内器面にヘラ削りを施した土器器の断片が出土している。



第6図 D 1号竖穴住居跡出土須恵器実測図

D 1号掘立柱建物跡（第7図）

D 1号掘立柱建物跡は、西側・南西側が調査区外へのびるため、梁行1間しか確認していない。桁行は4間である。南側及び北側の梁間は約10尺を測る。桁行の柱間寸法は、北側より約6尺、約8尺、約5尺、約6尺である。柱穴の断面形は深い筒状を呈し、深さ約40cm～約80cmを測る。

D 2号掘立柱建物跡（第8図）

この建物跡は、東側・南側が調査区外へのびるため、一部が未確認であるが、2間×3間の掘立柱建物跡である。確認できた梁行の柱間寸法は、西側より約8尺、約6尺を測る。西側の桁行の柱間寸法は、約10尺の等間である。東側の桁行の柱間寸法は、北側より約10尺、約9尺が確認できた。柱穴の断面形は深い筒状であり、深さ約38cm～約80cmを測る。

この建物跡の東側桁行が西側に僅かに振れるために、全体の平面形がやや不整形を呈しているが、現場で検討した結果、建物跡として認定した。

D 3号掘立柱建物跡（第9図）

この建物跡は、2間×3間の掘立柱建物跡である。梁行は約14尺、桁行は20尺を測る。北側及び南側の梁行の柱間寸法は、西側より約8尺、約6尺である。西側桁行の柱間寸法は、北側より約6尺、約8尺、約6尺を測る。東側桁行の柱間寸法は、北側より約4尺、約8尺、約8尺である。柱穴の断面形は深い筒状もしくは二段の深い筒状を呈しており、深さ約34cm～約90cmを測る。

3. 遺物

(1) 遺物出土状況について

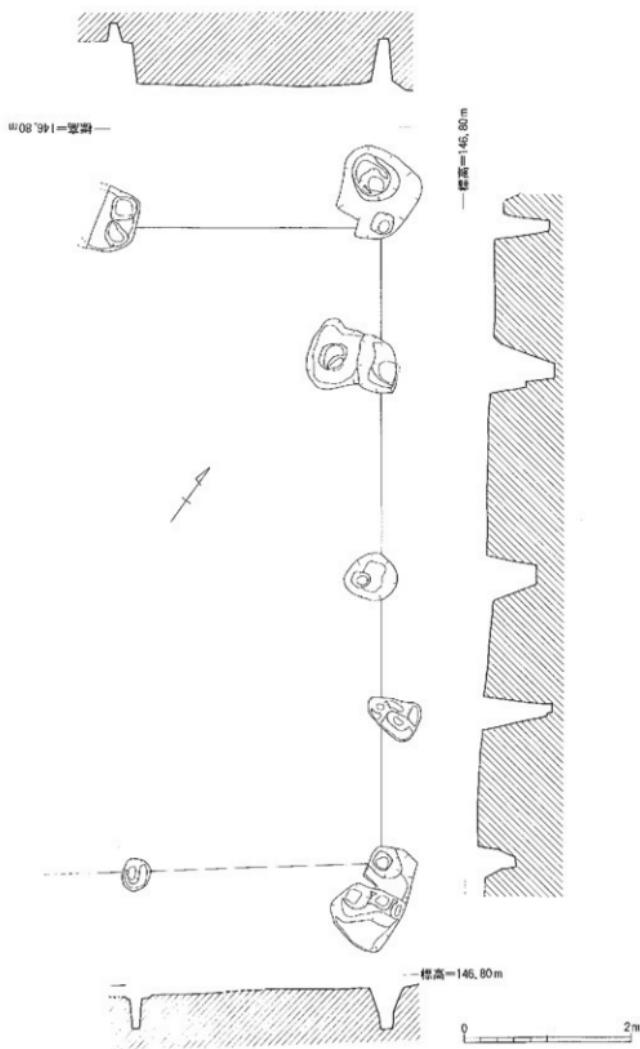
Ⅲ層下部を中心に、弥生土器・須恵器・土師器が出土した。弥生土器と須恵器・土師器との間には、出土層位の違いは認められなかった。これらの遺物は、調査区のほぼ中央部の緩傾斜地に分布している。

縄文時代晩期の遺物は、Ⅳ層上部から出土した。遺物の出土量は少ない。

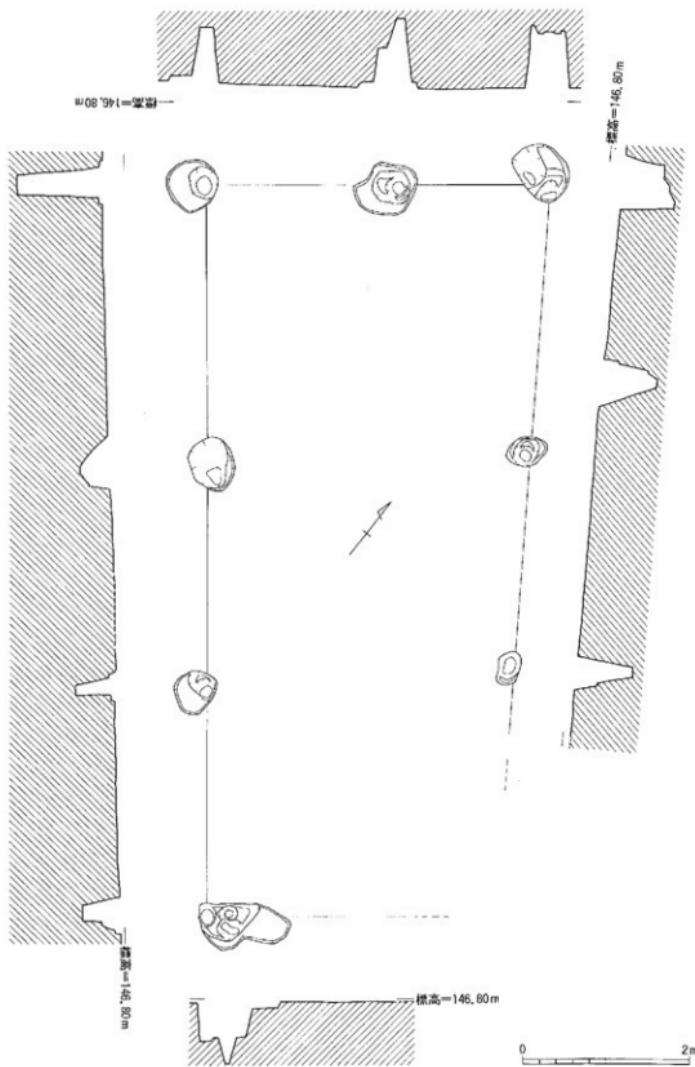
(2) 遺物について（第10図・第11図）

第10図1は縄文時代晩期の精製浅鉢である。口縁部は短く立ち上がり、頸部は強く「く」の字形に屈曲する。2～5は弥生土器である。2は後期の鉢形土器であり、内外器面には部分的にハケ目が残る。3は中期の甕形土器の底部である。端部が「ハ」の字形に開く。4は中期の壺形土器の底部であり、外器面には丁寧なヘラミガキが施される。5は後期の甕形土器で、口縁部は外に開きながら立ち上がり、端部が短く突出する。頸部で強く屈曲し、丸くなる胴部に続く。6・7は須恵器の壺である。6は口縁部で、端部が丸くなる。7は肩部から胴部にかけての部位である。外器面には、横位の沈線文と櫛描波状文が施される。8・9は土師器の壺である。8は頸部で「く」の字形に屈曲し、口縁端部は丸くなる。外器面には擬位のハケ目、斜め方向のヘラケズリが施される。9の口縁部は外に開きながらのび、端部は丸くおさまる。頸部は弱く屈曲し、外に丸くなる胴部に続く。10は土師器の壺の把手である。内器面では縱方向のヘラケズリが観察できる。

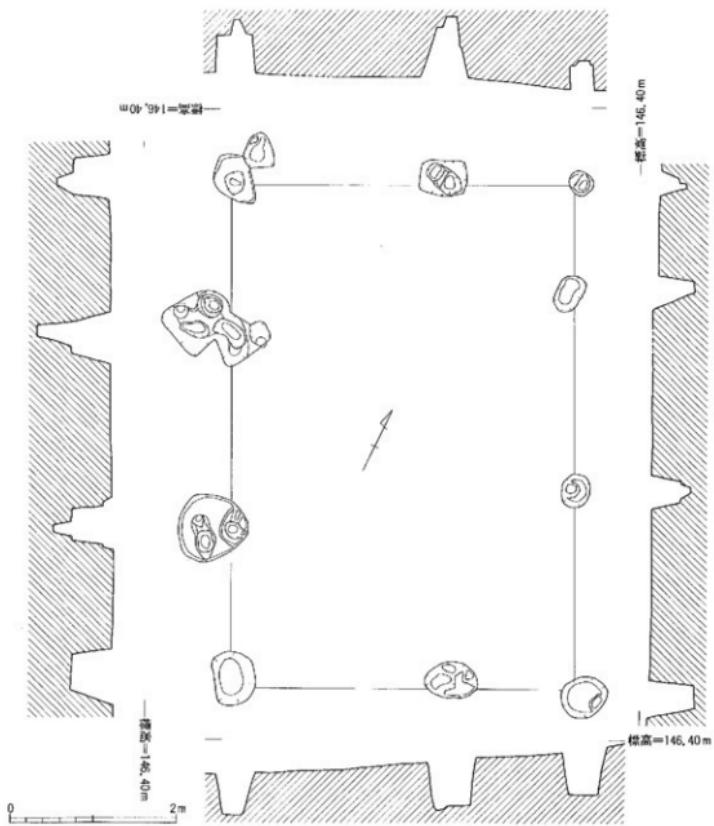
第11図1は石匙であり、略三角形の一辺に矧い摘みが付く平面形態をしている。表面は縁辺部からの二次加工が全面に及び、裏面の二次加工は縁辺部のみに施されている。2は偏平な縱長削片を使用した打製石斧である。体部の下部が欠損している。表裏面には縁辺部に二次加工がある。3は磨製石斧である。体部の下部が欠損しており、その箇所に再加工を施している。再加工の磨研は欠損部が大きいため、全面に及んでいない。



第7図 D1号据立柱建物跡実測図



第8図 D 2号掘立柱建物跡実測図



第9図 D 3号振立柱建物跡実測図

第1表 遺物観察表

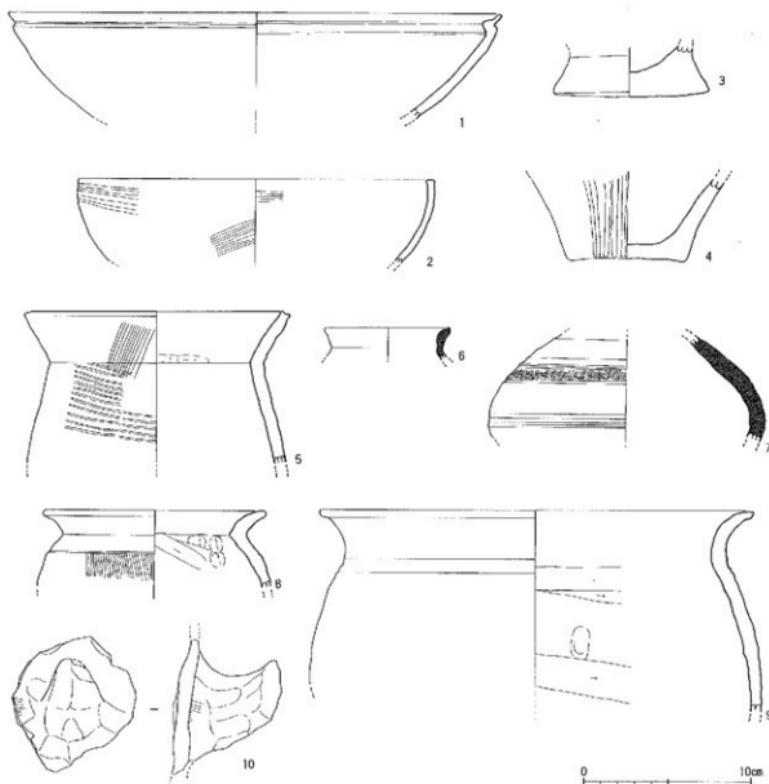
第5図

種	出土地点	層	部 位	法量 (cm)	色 調 (外/内)	地 土	調 整・文 样			統 成	備 考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	D-1号 堅穴住居	床面	坏	14.5(11.6) 高さ(4.5)	赤褐色	石英・長石・佐	ヘラ跡	ヘラ跡		良好	赤色顔料

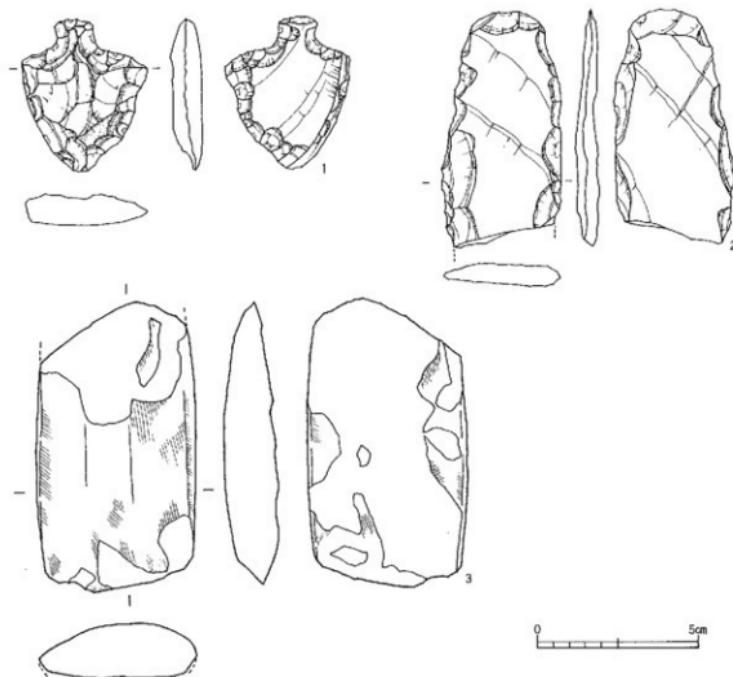
第2表 遺物観察表

第6図

種	出土地点	層	部 位	法量 (cm)	色 調 (外/内)	地 土	調 整・文 样			統 成	備 考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	D-1号 堅穴住居	床面	底盤深處	高さ(20.1)	灰青色	石英・長石・鐵等	平行タテ 4	同心円 タテ		良好	



第10図 95—道路区出土遺物実測図



第11図 95一道路区出土石器実測図

第3表 遺物観察表

第11図

	出土地点	層	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	尖端	側面
1	95一道路	N No.8	石砲	安山岩	4.7	3.8	1.0	17.0		
2	95一道路	*	打制石斧	綠色片岩	(7.2)	(3.7)	(0.7)	(24.3)	鋸齒	
3	95一道路	*	磨製石斧	綠色片岩	(8.9)	(4.9)	(1.6)	(91.7)	鋸齒	再加工

第4表 遺物観察表

第10図

出土地点	層	部位	法 番 (cm)	色 調 (外/内)	地 土	調査・文 稿			良 壓	備 考
						外表面	内表面	口算・底部		
1	9.5道路P26	縦文土器 花鉢 高さ(6.4)	口径(29.6)	緑褐色	石英・長石・雲母 花いへラ巻き	花いへラ巻き	花いへラ巻き	ナダ	良	
2	9.5道路P17	糞生土器 体	口径(21.2) 高さ(4.8)	外 赤褐色 内 淡青褐色	石英・長石 黒色柱	ハケのちナ ゲ	ハケのちナ ゲ	横ナダ	良	
3	9.5道路P12	糞生土器 焼成部	高さ(3.0) 底径(3.0)	赤褐色(内面 淡灰色)	長石・雲母・角閃 石	ヘラ状工具 によるナダ	ナダ		良	
4	9.5-道路 表揮	糞生土器 焼成部	高さ(4.9) 底径(6.9)	外 赤褐色 内 淡青褐色	石英・長石	ヘラ巻き	ナダ	横ナダ	良	
5	*	糞生土器 寛	口径(6) 高さ(1.1)	淡赤白色	長石	ヨコ方向の タタキのち 一部タマハ ケ	タタキのナ ゲ	横ナダ	良	
6	*	糞生器 唐	口径(7.5) 高さ(1.9)	青褐色	長石	圓転ナダ	圓転ナダ	圓転ナダ	良	
7	*	糞生器 唐	最大径(6.6) 厚さ(0.9)	外 青褐色 内 青褐色	長石・角閃石	圓転ナダ 焼状文	圓転ナダ	圓転ナダ	良	
8	*	土器器 突	口径(13.3) 高さ(4.6)	赤褐色(内外側 淡褐色)	長石・角閃石	ナダ方向の ハサ	ヘラ削り	横ナダ	良	
9	*	土器器 突	口径(26) 高さ(12.1)	後赤褐色 下平 淡褐色	長石・他	ナダ	ヘラ削り	横ナダ	良	
10	*	表揮 土器器 把手		石英・角閃石 赤褐色柱・長石	ナダ	ヘラ削り			良	

第2節 50号建物跡とその周辺地区の調査について

1. 調査に至る経過（第13図）

50号建物跡は、昭和45年に調査が行われ（第四次調査）、従来「長者原礎石群」と呼称されていたものである。当時の調査では、列をなす礎石4基と建物から北西に離れた地点に2基の礎石、及び礎石を抜き取った跡の根石遺構7基が確認されており、その調査成果から2間×4間の礎石建物跡の存在が明らかにされている（第13図）。しかし、調査期間の制約もあり、礎石群の中心部を掘り下げるという部分的なものにとどまっていたため、今回、礎石の広がりを確認するための再調査及び礎石周辺の状況を把握するための調査（9.5-長者原1区）を行った。

2. 50号建物跡について（第12図・第14図）

調査はまず、前回の調査後に埋め戻された埋土を除去し、遺構を露出する作業を行った。その後、未発掘部分の土層断面から土層の堆積状況を観察した。土層のはとんどが後世の擾乱による層であったが、下部に炭化米、炭化材、及び焼土を多量に含む黒褐色土層（VI層）と炭化米などを少量含む黄褐色土層（VII層）の2層を確認することができた。

前回の調査で明らかにされているが、炭化物を土層中に包含することは、この礎石建物が、火災によって焼失したことを物語っており、炭化物を多量に含むVI層と少なくなるVII層の境に当時の生活面が存在するのではないかと推察した。

そこで、未発掘部分については、VI層を除去しながら掘り進めることとした。VI層からは、土層断面で確認したとおり多くの炭化物を検出した。その多くが炭化米で埋土と共に併せて取り上げ、水洗選別を行った。



第12図 95—I区遺構分布図

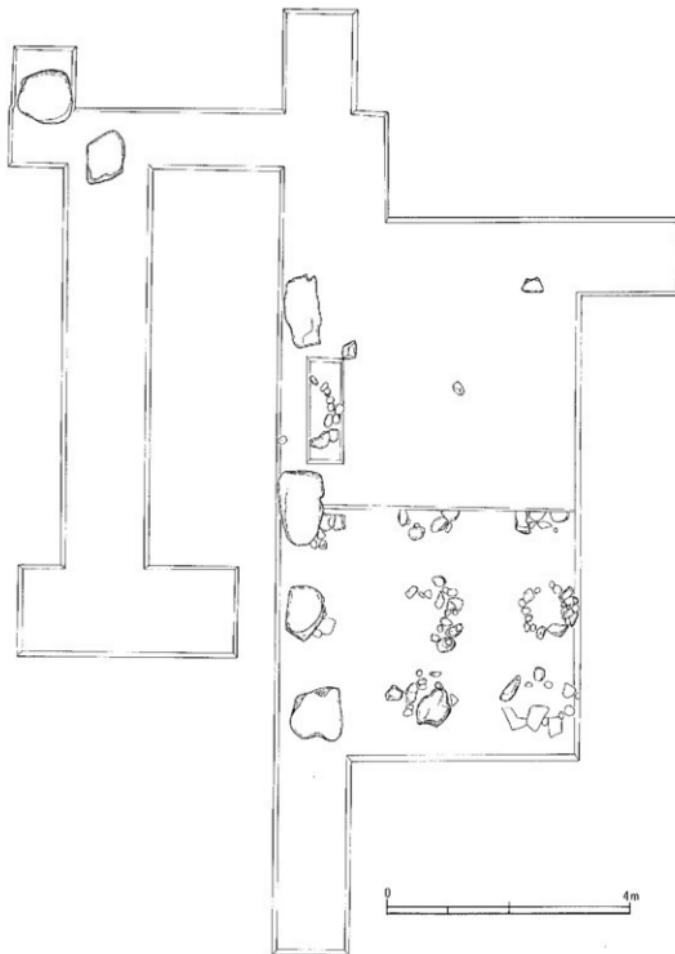
炭化材については、火災による建物の倒壊状況及び当時の生活面を傍証する手がかりになると考え、図中に記録し取り上げた。

VI層を掘り下げⅦ層上面に至ったが、新たな礎石は検出できなかった。後世に抜き取られたのであろう。礎石が存在したと思われる部分から一部根石が検出されたため、これを露出させるため、Ⅶ層をさらに掘り下げるのこととした。その結果、前回の調査で北側の端と思われた礎石列からさらに北側に一列根石の並びが確認された。

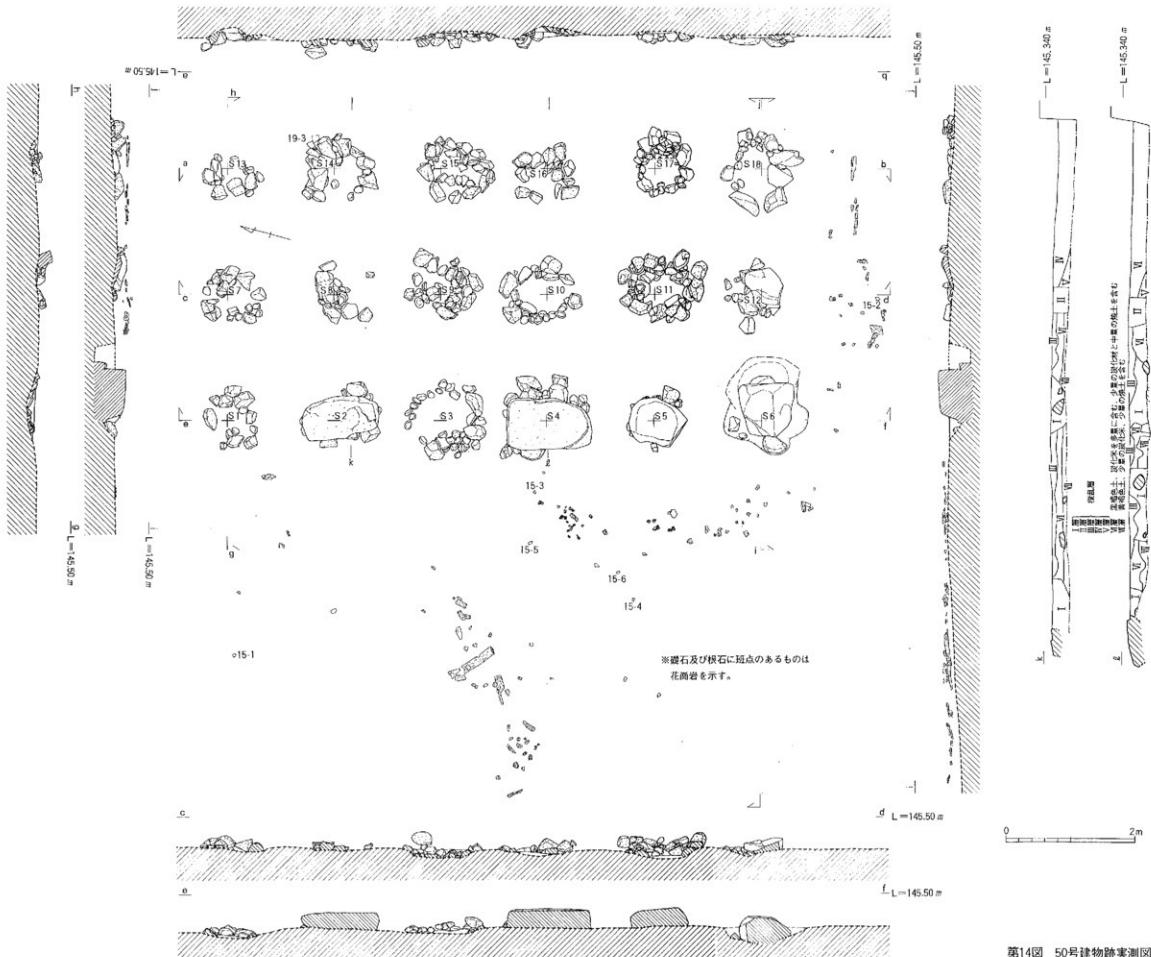
礎石及び根石の特徴を個別にまとめると次のとおりである。

S 1 碓石無し。13個の根石が南北0、8m、東西1、0mの範囲で環状に残る。石材は、花崗岩、安山岩の角礫、砂岩の凹窪。

S 2 南北1、2m、東西0、7mの礎石を有する。石材は花崗岩。上面はほぼ平坦で、礎石作出時の亀裂痕を残す。南北、東西方向での上面の傾きは認められず、ほぼ水平にすればされている。礎石下部に8個の根石がみられる。



第13図 昭和45年調査時の実測図



第14図 50号建物跡実測図

- S 3 碓石無し。3 1 個の根石が南北 1、3 m、東西 1、2 5 m の範囲で環状に残る。西側に礫の集中がみられ、全体的に砂岩製の円礫が多い。断面をみると、大形の花崗岩製角礫 1 個が浮いた状態にあり、礫石をすえた後の微調整を行うために使用されたのではないかと思われる。
- S 4 南北 1、3 m、東西 0、8 m の礫石を有する。残存する礫石の中では一番大形のものである。石材は花崗岩。上面は平坦で、傾きは南北方向ではほぼ水平であるが、東西方向では東側がやや高くなっている。礫石下部に 1 4 個の根石がみられる。
- S 5 南北 0、9 m、東西 0、7 m の礫石を有する。石材は安山岩。残存する礫石の中では一番小形のものである。上面はほぼ平坦に整形されているが、周縁部分は下部に沿ってカーブを描く。平坦部の範囲は、南北 0、6 m と東西 0、5 m で、この上部に住がすえるならば、丸材であれば直径がおよそ 0、5 m 以内のものとなるであろう。
- S 6 南北 0、8 m、東西 0、8 m の礫石を有する。石材は安山岩。上面は、荒削段階の棱線を残す。他の礫石に比べ、上面のレベルが低く水平を保っていない。また輪縫からもやや東にずれている。これは、礫石東側の搅乱層の影響を受けているものと思われる。搅乱層内には、根石が 1 0 個程度混入しており、埋込みは礫石下部にまで及んでいた。埋土はほとんどしまりがなく、このため、搅乱層内に礫石が沈み込んだのであろう。搅乱層内の根石は除去したため、本来は、1 0 数個の根石が存在したと思われる。
- S 7 碓石無し。1 9 個の根石が南北 1、0 m、東西 0、9 m の範囲で環状に残る。石材は、花崗岩、安山岩の角礫、砂岩の円礫。
- S 8 碓石無し。1 5 個の根石が輪縫が交差する部分に集中して残る。石材は、花崗岩、安山岩の角礫、砂岩の円礫。南側部分にはほとんど根石がないが、抜き取られたのか、礫石をすえる上で必要としなかったのかについては判断できない。
- S 9 碓石無し。2 7 個の根石が南北 1、3 m、東西 1、2 m の範囲で残る。環状にならず礫石直下と思われる部分ににも根石を配しているのが特徴的である。石材は、花崗岩、安山岩の角礫、砂岩の円礫。大形の花崗岩角礫の 1 個が浮いた状態で検出されている。礫石をすえた後の微調整のために使用されたものと思われる。
- S 10 碓石無し。2 5 個の根石が南北 1、3 m、東西 1、1 m の範囲で環状に残る。石材は、花崗岩、安山岩の角礫、砂岩の円礫。大形の花崗岩角礫の 2 個が浮いた状態で検出されている。S 9 の事例と同じと思われる。
- S 11 碓石無し。3 6 個の根石が南北 1、4 m、東西 1、2 m の範囲で環状に残る。石材は、花崗岩、安山岩の角礫、砂岩の円礫。多くの根石が浮いた状態にある。礫石をすえた後下部周縁に埋め込み微調整を行ったものと思われる。
- S 12 碓石下部の一部が残る。巨大な根石の一部とも考えられるが、肉眼による観察では、他の根石に比べ表面の磨耗がなく、割れたような痕跡をとどめていたこと、また、この石の下部に小形の根石が確認されたことなどからこのように判断した。礫石を抜き取る際に割られたものと思われる。その周辺には 1 4 個の根石がみられる。
- S 13 碓石無し。1 5 個の根石が南北 0、9 5 m、東西 0、7 m の範囲で環状に残る。他の根石の配置と比べるとやや規模が小さい。石材は、花崗岩、安山岩の角礫、砂岩の円礫。
- S 14 碓石無し。1 8 個の根石が南北 1、1 m、東西 1、0 m の範囲で環状に残る。石材は、花崗岩、安山岩の角礫、砂岩の円礫。根石と近接して同一個体の平瓦片 2 点が出土している。
- S 15 碓石無し。2 7 個の根石が南北 1、2 m、東西 1、0 m の範囲で環状に残る。石材は、花崗岩、

安山岩の角礫。砂岩の円礫は使用されていない。S 9 と同様礫石直下と思われる部分にも根石が配置されている。

- S 16 磨石無し。16個の根石が南北1、0m、東西0、9.5mの範囲で環状に残る。小形の根石は比較的少ない。石材は、花崗岩、安山岩の角礫。砂岩の円礫は使用されていない。
- S 17 磨石無し。32個の根石が南北0、9.5m、東西1、1mの範囲で環状に残る。砂岩製の円礫が多く、東側に集中部がみられる。
- S 18 磨石無し。22個の根石が南北1、3m、東西1、3mの範囲で環状に残る。花崗岩、安山岩製の大形の角礫の隙間を埋めるように砂岩製の円礫が配置されている。

以上、調査の概略を述べたが、調査の成果及び問題点をまとめると次のとおりである。

50号建物は、2間×5間の柱状による礫石建物である。ただし、建物東側部分については後世の擾乱が遺構面の下部まで達しており、また、建物北側部分については、農道が通っており未発掘であるため、礫石列がさらに北及び東側に存在する（存在した）可能性も残す。

残存する礫石の上面を観察し、柱の座っていた部位を確認することに努めたが、肉眼ではそれらしき痕跡は認められなかった。図上復元による建物の規格は、一尺を30cmと考えた場合、桁行距離2.7、5尺（8、2.5m）柱間距離5、5尺（1、6.5m）、梁行距離1.3尺（3、9.0m）梁間距離6、5尺（1、9.5m）となる。また、図上復元による軸線を基準とすれば、その方位は、N 14° 54' Wとなる。

建物周辺から出土した炭化材の多くは小破片で劣化が激しく、一部の保存状態良好なものを観察したところ、丸材と思われる直径5～6cm程度のものと直径10cm程度のものがみられた。柱材というよりも建築部材の一部と考えておきたい。出土量が少なかったため、倒壊状況を考察するには至らなかった。ただし、炭化材の垂直分布を観察すると一定のレベルが保たれており、このレベルもしくはその上下に当時の生活面が推定できる。炭化材の出土層はⅤ層下部である。

これまで調査された鞠智城跡の礫石建物における礫石の構築方法は、地業穴を穿ち、直接礫石を埋設するという手法がほとんどであった。それに対し、この建物は礫石基底部に根石を配し構築するというこの城跡の中では独特の手法を採用している。残念ながら、地業穴を平面及び土壠断面で把握することができなかつたが、おそらく地業穴基底面に根石を環状または面的に配し、礫石をすえ、礫石上面を水平に整えるため、場合によっては微調整のため礫石下部周縁または側面にさらに根石を咬ませたのであろう。この手法は從来「宮野礫石群」と呼称されている49号建物、20号～22号建物、38号建物の一部に採用されているのみである。

建物の規格及び方位を元にこれまで出土している建物と比較すると、桁行距離、梁行距離および柱間距離梁間距離において類似するものは認められなかった。方向についてみれば、同一方向を示すものはなかったが、22、23号建物（礫石建物）、26号建物（掘立柱建物）と、3°～4°の振れが認めるられるものは同一方向を示す。一部を除き長者原地区全体の建物と同一の方向性を示す。

なお、今回の調査は、今後の整備事業を念頭に行ったため、下部層の掘り下げを行っていない。数例の礫石建物下部により古い時期の掘立柱建物が検出されている状況を考慮すると、この建物の下層より掘立柱建物が検出される可能性は否定できない。今後の整備事業の進捗状況をみながら再調査を行う必要がある。

3. 遺物

(1) 遺物出土状況について

50号建物跡周辺からは、布目瓦・土師器・須恵器の破片が散布状に出土した。これらの遺物が50号建物跡周辺より出土する遺物の中心で、これに少數の鉄製品が混じる。遺物の出土層位は、50号建物跡で分層したVI層～VII層上面とはほぼ同一層であり、50号建物跡の炭化材とはほぼ同じレベルである。

また、VI層より少數の青磁片、VII層より少數の縄文土器・弥生土器が出土した。この青磁片・縄文土器・弥生土器の出土層位は、包含層が薄いため、布目瓦・土師器・須恵器の出土層位と区別できなかった。

(2) 遺物について

①土器

a. 50号建物周辺の土器 (第15図)

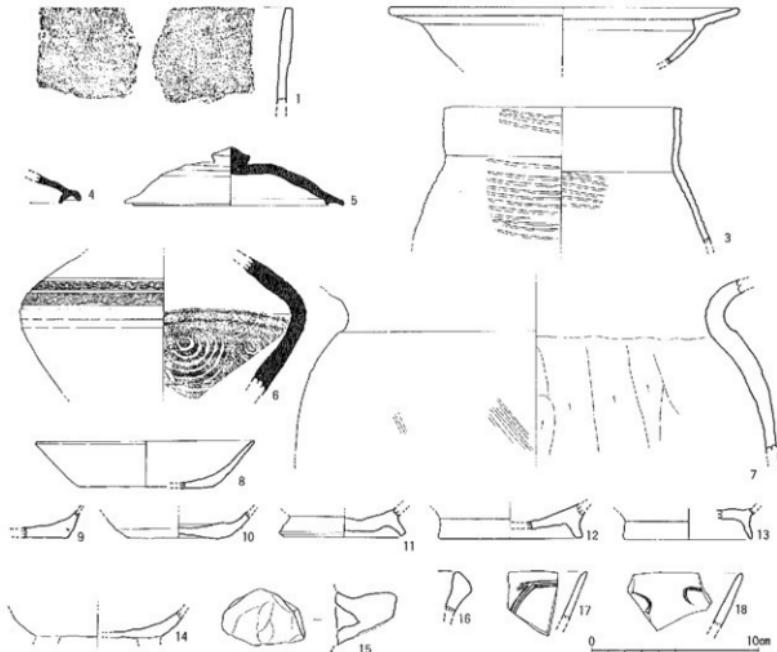
1～3は須恵器である。1は盃もしくは瓶子の口縁と推定される。口縁部が外反し、縫部はやや垂下して丸くおさめる。2は甕の腹部の破片である。内器面を同心円タタキ、外器面に幅0.5cm以上の荒い平行タタキで調整している3は瓶子の底部と推定される。外器面に自然釉が見られる。4～7は土師器耳である。4は平坦な底部を持つ土師器で底部に粘土紐巻き上げ痕跡を残す。底部径8cmである。5・6は高台を持つもので底部厚0.3cmで底径8cm～9cm、底部高1cmと形態的に類似する。6はいわゆる回転台土師器で赤彩を施している。7は底部が丸く外器面では口縁部と底部間に段を持つ。



第15図 50号建物跡周辺出土遺物実測図

b. その他の95—長者原I区の遺物（第16図）

1は縄文時代晩期の粗製の深鉢である。口縁端部はナデにより面を持つ。2・3は弥生時代後期の土器である。2は高杯で杯部下半が内傾したち口縁部が大きく外反する3は後期の変形土器で口縁部はほぼ直立し、端部は面を持つ。肩部外器面に平行タタキが残る。口縁部外器面は平行タタキを施した後ヨコナデで擦り消している。4～6は須恵器で4・5は杯蓋である。4は内面に身受けのためのかえりを持つ。5は宝珠つまみ、内面に短いかえりを持つ。4・5は7世紀後半と推定される。7は土師器甕の体部で外器面の口縁部と肩部の間に段を持つ。内器面胴部は下から上への荒いヘラ削りを施す。8～14は土師器杯である。8～10は平底の底部を持つもので口縁部が斜め上方に伸びる。底径は6cm～9cmと法量にばらつきがある。8は器厚0.3cmと薄く製作している。10は回転台を用いて製作したと考えられる。11～14は高台を持つもので底径は6～7cmとはば一定である。11は底部の厚さが0.8cmで高台が貼り付き、端部に面を持つ。見込み部分に径3cmの沈線が残っている。回転台を用いて製作したと思われる。12は底部の厚さが0.4cmで高台がやや外方に貼り付き、端部に緩やかな面を持つ。13は底部高が1.8cmで杯部にはば垂直に厚さ0.4cmの断面三角形の高台が伸びる。14は高台が剥離している。底部厚は0.3cmである。



第16図 95—長者原I区出土遺物実測図

15は上飾器臺及び瓢の把手である。体部と接合する面の中央部を指先で空洞を作成していることが伺える。16は須惠質擂鉢である。いわゆる東播系須恵器と考えられる。17・18は吉縫の碗で樹脂文を施している。

②瓦

出土した瓦は丸瓦と平瓦に分類される。

イ、丸瓦（第17図）

出土した丸瓦は行基葺きの丸瓦で内径は5~7cmである。粘土の厚さは2cm程のものが多い（1・2・3・5）が、4は1.5cmと薄く、6は2.5cmと厚い。凸面の調整はナデで丁寧に調整している。破片のためナデの規則性を詳細に分析できないが、タテ方向にナデしているものに2・4、横方向にナデしているものに1がある。

内面には布目の圧痕が残存している。1は凹面端部に制作時に凹面巻いた布の端部痕跡が残存している。側面の調整はいずれも丁寧に施している。1・2・4は側面の凹面側が平坦で凸面が平坦でない。平坦部が桶巻きの模骨の分割突帯に接していた部分の可能性がある。6は粘土板を継ぎ足しているためか側面に3つの面を持つ。すべての面にヘラ切りを施している。中央の面が最後のヘラ切りの面である。

ロ、平瓦（第18図・第19図）

平瓦は外器面にタタキの痕跡を持つもの（第18図）と調整によりタタキ痕跡が消去されているもの（第19図）に分類される。前者は格子タタキを持つものと繩目タタキを持つものに分けられる。これらを7次調査の知見の分類に従って格子タタキを持つものをI類、タタキ痕跡をナデ消しているものをII類とし、繩目のタタキを持つものをIII類とする。

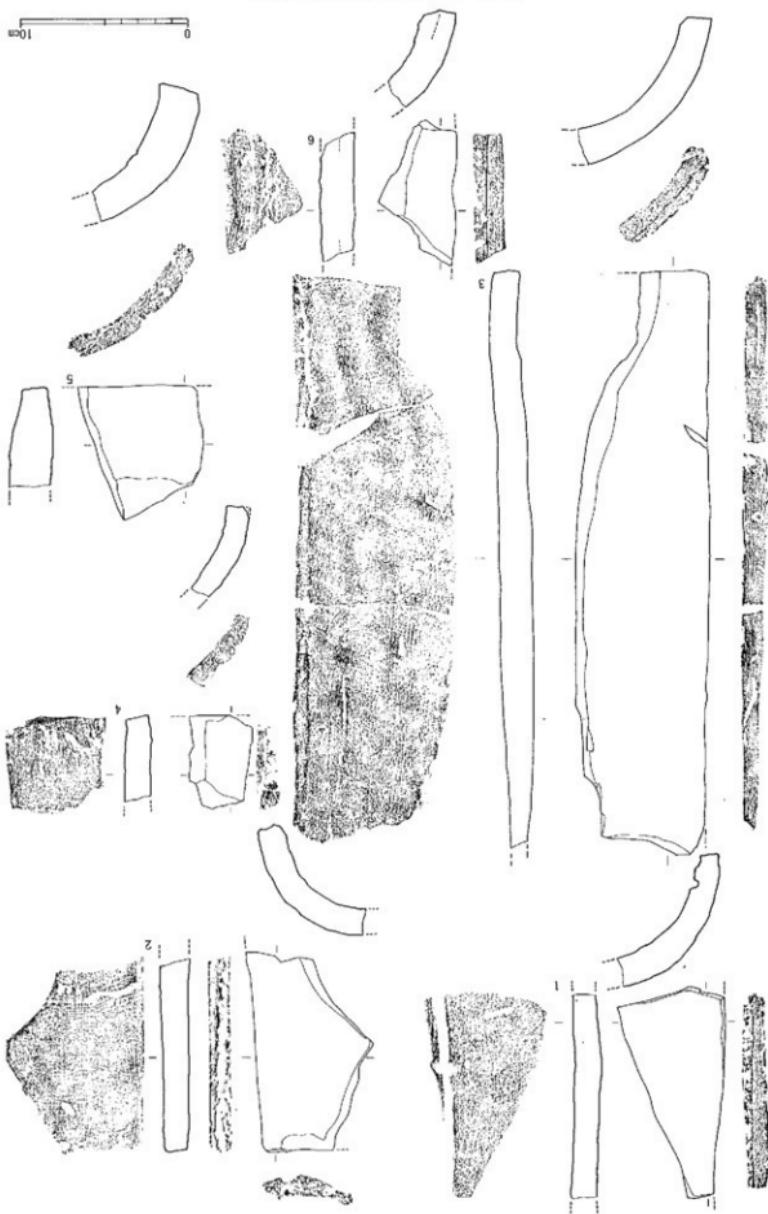
I類は第18図の1~5である。1・2は宮野磧石群東西溝付近出土瓦のIc類（幅0.5cm、間隔0.7cm~0.9cmの刻線とそれに直交する幅0.5cm、間隔1cm前後の刻線を加えたタタキ板による大形の格子タタキ目を持つものに相当するもの）で、ほぼ正方形に近い格子目タタキの痕跡を残すものである。3~5は1・2は宮野磧石群東西溝付近出土瓦のIa類（幅0.1cm~0.2cm、間隔0.25cm~0.5cmの刻線とそれに直交する幅0.2cm~0.4cm、間隔0.6cm~1.7cmの刻線を加えたタタキ板による長格子のタタキ目を持つもの）に相当するものである。4・5は大部分ナデ調整でタタキ痕跡を消している。内器面には布目が残存する。瓦の器厚はいずれも2.4cm前後である。

IV類は幅1cm前後の繩目タタキの痕跡を残す。ただし、繩目タタキの後、器面をナデで平滑にしている。III類は、ナデ調整の方向等の詳細は不明であるが、第19図の4・6は基本的にタテ方向にナデ調整を施している。I・II・IV類いずれも凹面に段が残る。幅4cm~5cm単位であり、桶巻き作りの桶の模骨の痕跡と推定される。4は側面部分を作成する際に粘土を斜めに補充している。5は縱方向の端部の凹面側が細くなっている。6は幅2.5cm程の範囲で横方向（左から右）に荒くヘラ削りをしている。

③鉄製品（第20図）

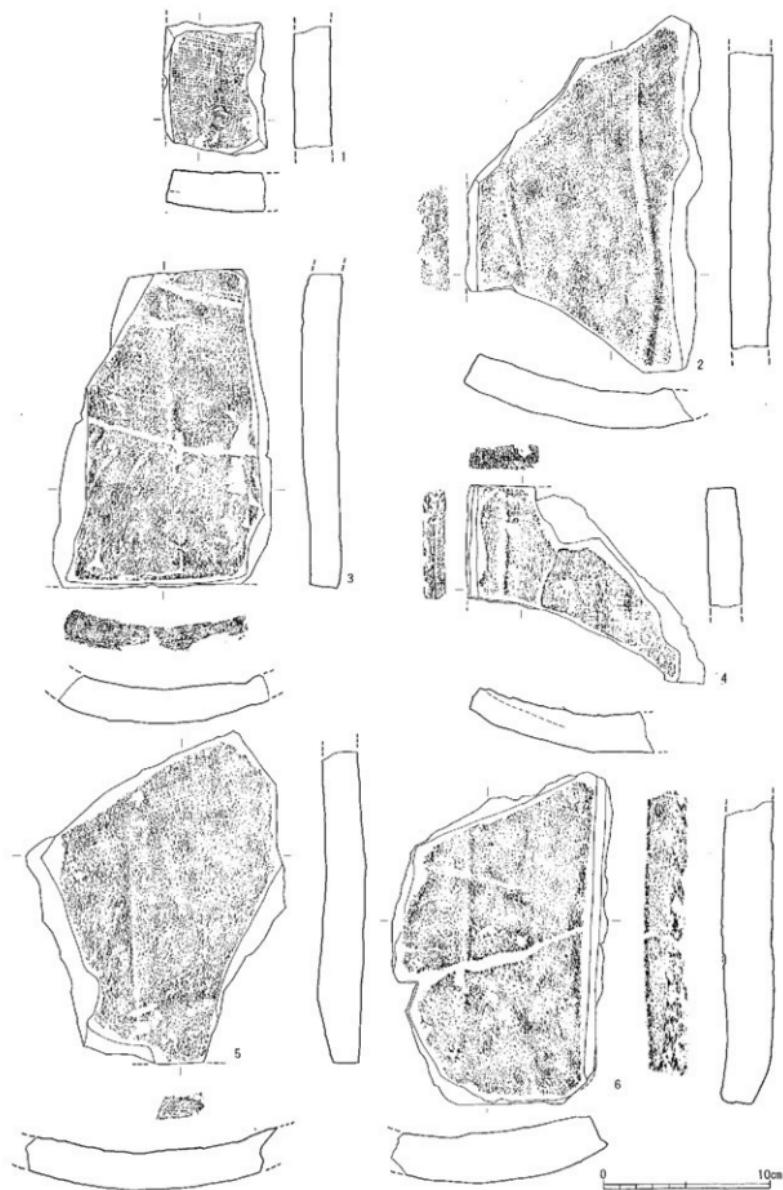
1~4は釘である。大形品（1）と小形品（2~4）がある。木質等は遺存していない。1は長さ19.5cm以上で断面は一辺1.2cmのほぼ正方形を呈する。先端部は欠損しているが、先端部を銳利にしていると推定される。頭部の形状は鋸により不明だが、片方に折れ曲がる。2は断面方形で一辺0.4cm~0.6cmである。先端部に近づくとやや長方形を呈す。頭部の形状は鋸により不明だがT字形に折れ曲がる。3は断面方形で幅0.6cm~1.1cmで一部長方形の断面を呈する。4は断面方形で幅0.6cm~0.8cmではほぼ正方形の断面を呈する。5は楔と考えられ、厚さ0.5cm、最大幅2.1cmである。

第17圖 95一號墓葬 I 区出土瓦器實測圖

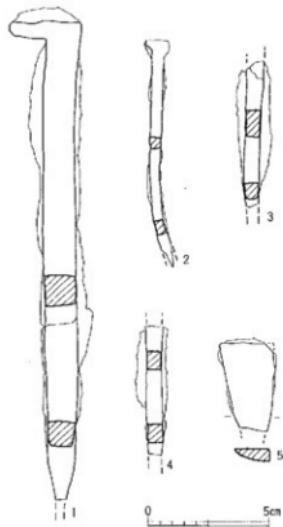


第16图 95—普善原I区出土平瓦实测图





第19図 95一長者原I区出土平瓦実測図



第20図 鉄製品実測図

第5表 建物観察表

第15図

出土地点	番号	形 索	後 量 (m)	色 調 (外/内)	地 上	調 整・文 標			焼 成	調 考
						外表面	内部面	口沿・底面		
1	50号建物	22	扇形口付	口付(1.4) 高さ(2.4)	青灰色	長石 他	回転ナガ	回転ナガ	良	數少?
2	*	3	網状鉢型	厚さ(0.6)	青灰色	長石・黒色粒	平行タキ	同心円 タキ	良	
3	*	6	須志器敷子底部	高さ(2.1) 直径(6.8)	外 黑褐色 内 青灰色	長石・黒色粒	ナダ	回転ナダ	ナダ	自然色(緑色)
4	*	13	上部器身	高さ(1.3) 直径(8.0)	赤褐色	石英・長石・安鈍 赤色酸化皮	ナダ	ナダ	ナダ	粘土被積み上げ 痕跡
5	*	8	土筋器身	高さ(2.1) 高台径(8.6) 高台高(1.1)	淡青褐色	長石・赤色酸化皮	ナダ	ナダ	ナダ	回転台使用?
6	*	14	土筋器身	高さ(1.6) 直径(4.7)	赤褐色	赤色酸化皮・雲母	回転ナガ	回転ナダ	良	南竈
7	*	4	上部器身	高さ(1.6) 直径(4.7)	赤褐色	長石・赤色酸化皮	ナダ	ナダ	ナダ	回転台使用?

第6表 遺物観察表

第16図

出土地点	層	部位	法 番 (cm)	色 四 (外／内)	地 上	調 査・文 種			被 容	備 考
						外表面	内表面	口唇・底部		
1 9.5-長岡1区	Ⅲ	褐色土器 壁部 深窓 1付	厚さ(0.7) 高さ(4.6)	褐褐色	石英、角閃石 長石、鉄	ナゲ	ナゲ	ナゲ	良	
2 *	*	赤土上身 高杯 形	口径(20.0) 高さ(3.5)	淡茶褐色	長石	ナゲ	ナゲ	ナゲ	良	
3 *	*	赤土上身 黒 口縁部	口径(14.4) 高さ(3.0)	褐褐色	長石、石英、雲母 赤色鉱化粒	ナゲ	ナゲ	ナゲ	良	
4 *	*	變形 信濃郡环口縫		青灰色	長石、黒色粒	回転ナゲ	回転ナゲ	回転ナゲ	良	重ね焼入痕跡
5 *	*	信濃郡环	口径(11.8) 高さ 3.5	淡青褐色	長石、石英、角閃石 滑り	回転ナゲ	回転ナゲ	回転ナゲ	良	
6 *	*	信濃郡	底部径(11.6) 約 3.5	青、褐青褐色 約 3.5	長石、黒色粒	回転ナゲ 剥落アリ 同 様ヘラ削り	回転ナゲ 心円タクミ の形斜ナ ゲ	回転ナゲ	良	
7 *	*	土師器要部	盤部径(23.9)	淡青褐色	長石、石英 赤色鉱化粒	ハケ目めら 横ナゲ	ヘラ削り		良	
8 *	*	土師器	底部径(30) 高さ 2.7	白褐色	石英、長石、黒色 粒	ナゲ	ナゲ		良	
9 *	*	土師器底部		青、褐青褐色 内 灰褐色	石英、長石、黒色 粒	ナゲ	ナゲ		良	回転赤切口?
10 *	*	上側部環底部	底部径(6.2) 高さ (1.5)	赤褐色	石英、長石 赤色鉱化粒	ナゲ	ナゲ	回転ヘラ 切り	良	
11 *	*	土師器環高台	高台径(7.0) 高さ (0.6)	赤褐色	赤色鉱化粒、雲母 長石、角閃石	ナゲ	ナゲ		良	
12 *	*	土師器環高台	高台径(8.0) 高さ (2.1)	淡青褐色	赤色鉱化粒、雲母 角閃石	ナゲ	ナゲ		良	
13 *	*	上側部環高台	底部径(7.0) 高さ (1.8)	赤褐色	赤色鉱化粒、雲母 長石	ナゲ	ナゲ	底部内面 削転ナゲ	良	
14 *	*	土師器環高台	底部径(6.6) 高さ (1.8)	淡青褐色	赤色鉱化粒、雲母 角閃石	ナゲ	ナゲ		良	高台剥離
15 *	*	土師器把手		淡赤褐色	石英、長石、角閃 石	ナゲ	ナゲ		良	
16 *	*	陶器 東京實業所作 口縁部		青灰褐色	回転ナゲ	回転ナゲ			良	重複系?
17 *	V	青磁口縁部	高さ (3.0)	淡褐色	青		曲板文		良	
18 *	*	青磁口縁部	高さ (3.5)	淡褐色	青		陶絵文		良	

第7表 遺物観察表

第17図

	出土地點	層	部位	法量 (cm)	色調	胎土	調査・文様			成形	備考
							凹面	凸面	側面		
1	95-1-1501区	V1~ V3上	瓦	タテ抜(1.4) 広(1.5) 狭(1.4) 広(1.9)	淡赤褐色	長石・雲母・角閃石・石英	布目正直	前方斜ナデ	ヘラ切り	良	布縫型復元
2	*	*	*	タテ抜(1.4) 広(1.8) ヨコ抜(1.4) 広(1.7)	淡赤褐色 暗赤褐色	長石・雲母・角閃石	右目正直	前方斜ナデ	ヘラ切り	良	
3	*	*	*	タテ抜(1.0) 広(2.1) ヨコ抜(1.5) 広(2.2)	淡赤褐色 灰灰褐色	長石・雲母・石英	布目正直	丁寧なナデ 筋割れにナ	ヘラ切り	良	
4	*	縦瓦	*	タテ抜(1.4) 広(1.5) ヨコ抜(1.2) 広(1.5)	青褐色	長石・石英	布目正直	前方斜ナデ	ヘラ切り	良	須恵質
5	*	V1~ V3上	*	タテ抜(1.6) 広(2.6) ヨコ抜(1.5) 広(2.6)	灰白色	長石・石英・角閃石	透減により 不明	筋割れにより 不明	ヘラ切り	良	
6	*	*	*	タテ抜(1.9) 広(2.1) ヨコ抜(1.9) 広(2.2)	青褐色	長石・雲母・角閃石	右目正直	ナデ	ヘラ切り	良	須恵質

第8表 遺物観察表

第18図

No	出土地點	層	部位	法量 (cm)	色調	胎土	調査・文様			成形	備考
							凹面	凸面	側面		
1	95-1-1501区	V1~ V3上	平瓦	タテ抜(1.9) 広(2.2) 狭(2.1) 広(2.3)	淡青灰色	長石・雲母・鉄	布目正直	斜格子 タタキ		良	
2	*	*	*	タテ抜(2.4) 広(2.5) ヨコ抜(2.4) 広(2.5)	灰白色	石英・長石・雲母 鉄	右目正直	格子タタキ ア	ヘラ切りナ	良	
3	*	*	*	タテ抜(2.4) 広(2.5) ヨコ抜(2.4) 広(2.5)	淡灰白色	雲母・淡石・鉄	右目正直?	格子タタキ	筋減のため ヘラ切り?	良	
4	*	*	*	タテ抜(1.9) 広(2.2) ヨコ抜(1.9) 広(2.2)	淡青灰色	長石・石英・雲母 鉄	右目正直 ナデ消し 筋方向ナデ	斜格子タタ キナデ消し	ヘラ切り	良	
5	*	*	*	タテ抜(1.7) 広(2.2) ヨコ抜(1.9) 広(2.3)	淡赤褐色	長石・石英・雲母 角閃石	右目正直 ナデ消し	格子タタ キナデ消し	ヘラ切り	良	
6	*	*	*	タテ抜(1.9) 広(2.1) ヨコ抜(1.9) 広(2.3)	淡赤褐色	長石・石英・雲母 角閃石	右目正直	網目タタキ		良	

第9表 遺物観察表

第19図

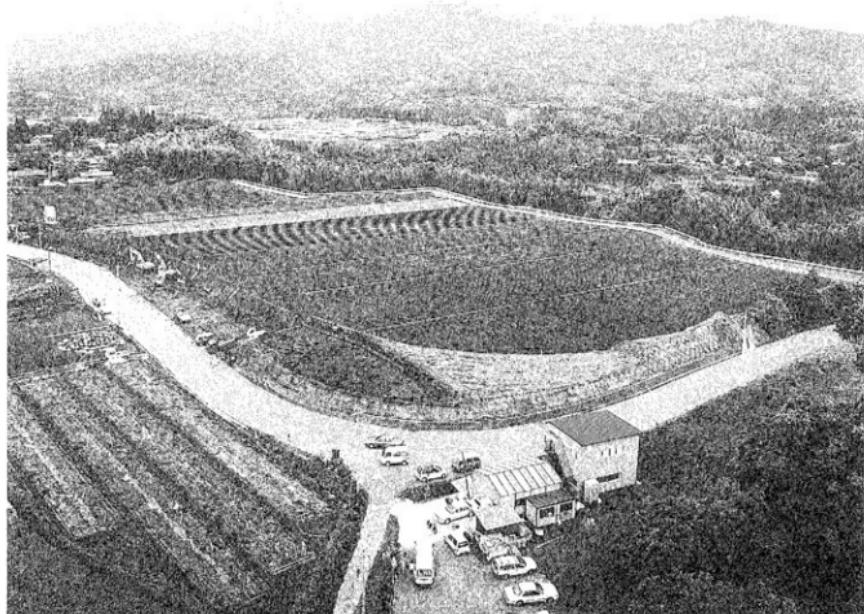
	出土地点	層	部位	法量 (cm)	色調	胎土	調査文様			成形	備考
							凹面	凸面	斜面		
1	95-長原1区 N-1上	平瓦		タテ抜(2.2) 広(2.3) 狹(2.0) 広(2.4)	青灰色	長石・石英	布目狂歌	不定方向ナデ	ヘラ切り	良	無焼
2	*	*	*	タテ抜(2.0) 広(2.5) ヨコ抜(2.0) 広(2.3)	淡白色	石英・長石・痕母 赤色酸化鉄・角閃 石	布目狂歌 模様きぬ跡	碧礫に上り 不明	ヘラ切りナ ダ	良	
3	*	50号 No.1 No.2	*	タテ抜(1.8) 広(2.0) ヨコ抜(1.4) 広(2.3)	褐色	石英・長石・痕母 赤色酸化鉄	布目狂歌	タテキ小網 縦方向ナデ	ヘラ切り	良	
4	*	N-1上	*	タテ抜(1.7) 広(2.0) ヨコ抜(1.7) 広(2.4)	青灰色	長石・痕母・角閃 石	布目狂歌 ヘラ調整	不定方向ナ デ	ヘラ切り	良	無焼
5	*	*	*	タテ抜(1.6) 広(2.6) ヨコ抜(2.1) 広(2.3)	赤褐色	長石・赤色酸化鉄	布目狂歌 横方向ナデ	筋子タケネ ナデ消し		良	
6	*	捲瓦	*	タテ抜(2.0) 広(2.8) ヨコ抜(1.5) 広(2.4)	灰白色	長石・石头・痕母 角閃石・赤色酸化 鉄	布目狂歌	ナダ ヘラ狂歌	ナダ	良	

第10表 遺物観察表

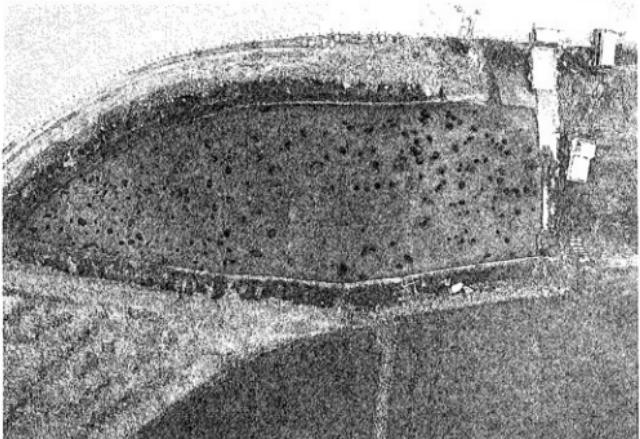
第20図

	出土地点	層	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	欠缺	備考
1	95-長原1区 N-1上 No.255	洗訂	(19.5)	1.2	1.3	(14.9)	先端部		大型
2	*	N-1上	*	(9.3)	0.5	0.6	(10)	先端部	
3	50号建物 No.20	*	(6.9)	(0.7)	(1.1)	(1.5)	基部・先端部		
4	95-長原1区 N-1上 No.254	*	(5.2)	(0.6)	(0.8)	(1.5.5)	基部・先端部		
5	*	N-1上	捲?	(3.5)	(2.1)	(0.5)	(17.5)	先端部	

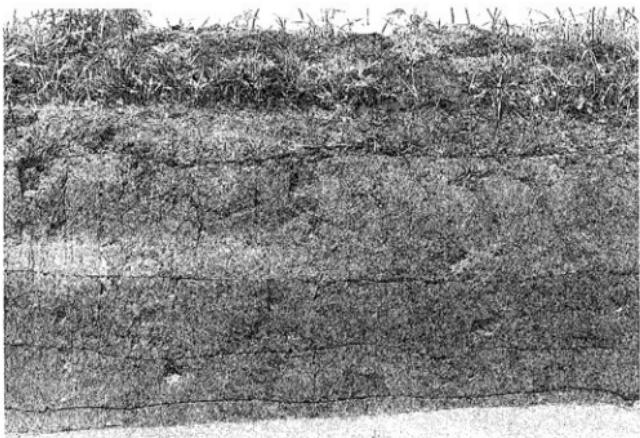
写 真 図 版



調査区遠景（南西上空より）
(95一道路区 調査完了、95一長者原Ⅰ区 調査前の状況)



95—道路区全景
(真上より)



95—道路区西壁土層断面
(東から)



D 3号掘立柱建物跡
(南東から)



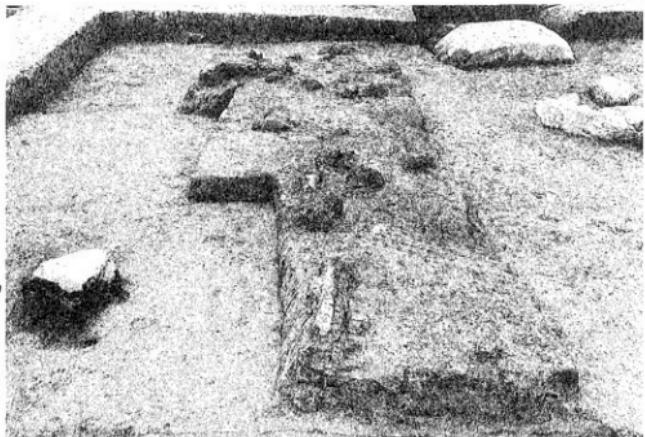
50号建物跡全景
(南から)

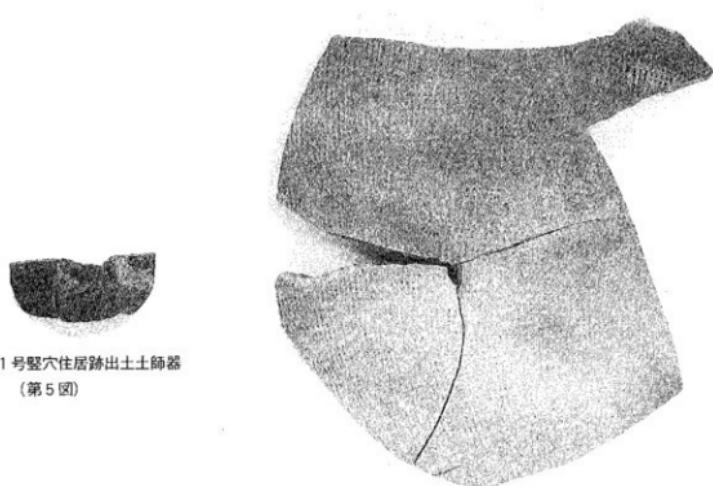


50号建物跡北側一部
(東から)



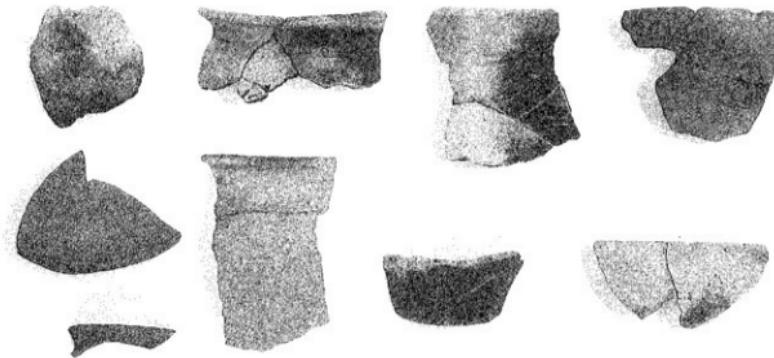
50号建物跡土層断面
(南から)





D 1号竪穴住居跡出土土師器
(第5図)

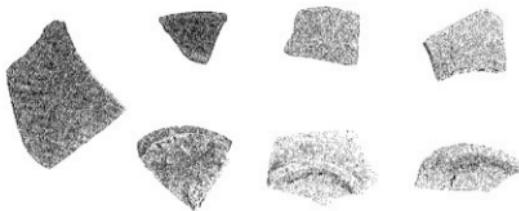
D 1号竪穴住居跡出土須恵器 (第6図)



95—道路区出土遺物
(第10図)



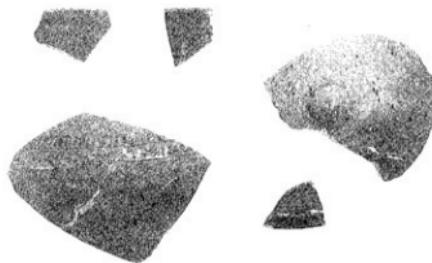
95—道路区出土石器
(第11図)



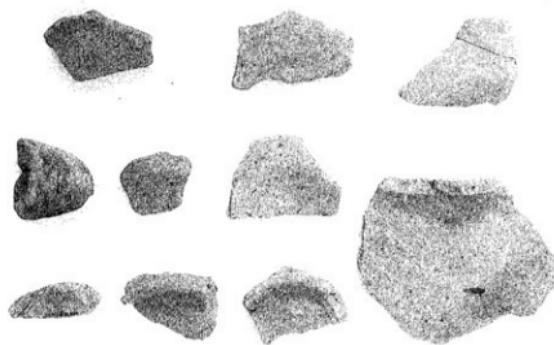
50号建物跡周辺出土遺物
(第15図)



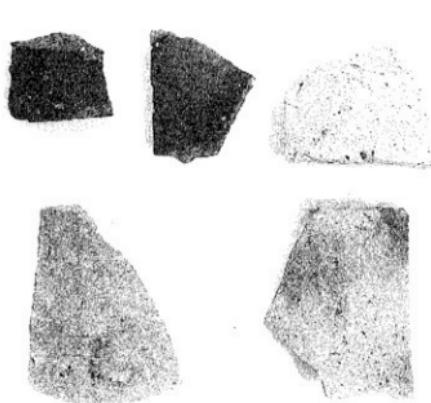
95—長者原 I 区出土土器
(第16図)



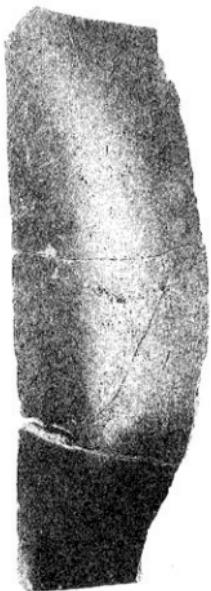
95—長者原 I 区出土須恵器
(第16図)



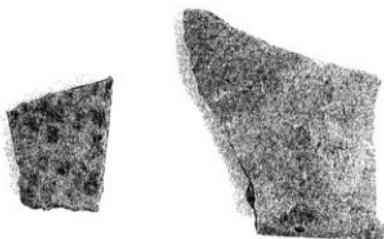
95—長者原 I 区出土土器
(第16図)



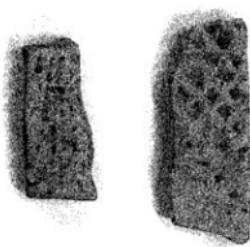
95—長者原Ⅰ区出土丸瓦（第17図）



95—長者原Ⅰ区出土丸瓦（第17図）



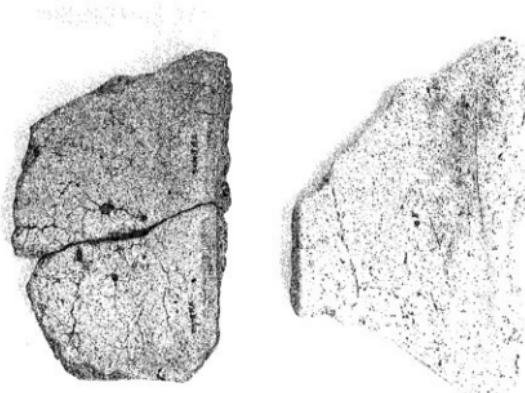
95—長者原Ⅰ区出土平瓦（第18図）



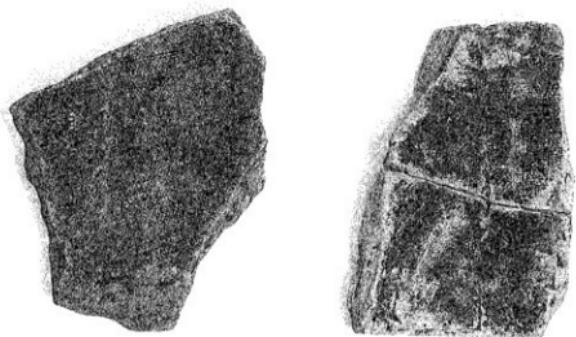
95—長者原Ⅰ区出土平瓦（第18図）



95—長者原Ⅰ区出土平瓦（第18図）



95—長者原 I 区出土石
(第19図)



95—長者原 I 区出土平瓦
(第19図)



95—長者原 I 区出土鉄製品
(第20図)

熊本県文化財調査報告 第157集
鞠智城跡

——第17次調査報告——

平成8年3月31日

編集発行

熊本県教育委員会

〒860 熊本県熊本市水前寺6丁目18-1
TEL (096) 383-1111 (代表)
文化財整備係 (内線 6714)

印 刷

株 大 和 印 刷 所

〒862 熊本県熊本市上島町920-11
TEL (096) 380-0303

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 157 集を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図
書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用
方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日